

平和の時代が来た

— 続 —

澁谷 榮 一

新井二丁目

一九四五年五月二五日

日に日に空襲は激しくなった。前々日の夜の空襲の時は、渋谷、新宿を中心とする山の手地域が目標だった。中野の南部もやられた。五月二四日、疎開中の姉と弟が切符を工面して、帰ってきた。久し振りで一家水入らずの夕食となった。長野から帰ってきた二人はのうのうと寝間着に着替えようとしていた。

ここは東京だぞ！彼等ももんぺ姿のまま寝たが、その夜空襲はなかった。みんな神経質になり過ぎているんじゃないのと言いながら、姉は栃木の親友の疎開先に泊まりがけで行った。

今日は来そうだなと、父と話し合い、全室の襖を外して部屋の一隅に立て掛けた。六歳の弟は母に添い寝してもらえると今夜も嬉しそうにしていた。弟が帰っているので、逃げ、落ち合う作戦を家族で打ち合わせをする。寝室以外の畳を上げ、皆で一部屋に寝る。弟は興奮して寝付かない。たしか十一時前だったろう、そんな早い時間に警戒警報が鳴る。いよいよよきた！弟の頭に乗っている鉄兜がいやに大きく見える。隣の朝戸さんの

怜子さんが来る。怜子さんは疎開せずに頑として陸軍氣象部（当時、阿佐ヶ谷・お伊勢の森にあった）の軍属として在宅しているが、空襲になると、我が家の地下室の避難同居人、まさに運命共同体である。父は地下室が大嫌いで絶対に入らない。

大空艇団が房総半島から首都に向かうとの情報と同時に空襲警報が鳴り渡る。東の方から、物凄い爆音が聞こえはじめる。

憲兵学校の中の高射砲陣地からも一斉に砲撃が始まり、砲弾の破片が屋根に落ち瓦が割れる音がする。「今日は凄いな」「……」恐怖の沈黙がつづく。「お父さん、大丈夫？」「ああ、大丈夫！」中と外で怒鳴りあう。どの位経ったろうか、ばったりと敵機は来なくなった。しかし、空襲警報は解除にならないばかりか、第二の大空艇団が伊豆半島から首都に向かっているとの情報が入る。外に出る。東の空が、そして、南の空が赤い。時折、ぱあつと赤さが強くなり、火災のひどさと、延焼の激しさを物語る。煙も激しく、我が家にも煙たい空気が伝わる。サイレンの音も聞こえる。そのうち西から赤い炎の反射を受けながら、最

初の編隊が物凄い低空で現れる。高射砲が唸っていたかどうかは、もう記憶にない。その時、爆弾の落下する音がし始める。地下室の階段をかけ降りる。皆が恐怖のまなざしを向け合う。爆弾の落下する音がとっても長い。どこにも落ちないでまだまだ続く。どうしたんだ？階段を昇って見にいこうとした瞬間、「危ない！」怜子さんが僕の足を引っ張った。僕は目の前の爆発と同時に、階段をずり落ちた。しばらく目の前は真っ暗で何がなんだかわからなかったが、ガシャン、ガシャン、カリン……と、瓦の割れる音やささまざまな音が入り交じって、爆弾の炸裂音に変わった。目を擦りながらとっさに外に出た。地下室の入り口の前には、油脂焼夷弾の油が塀に飛び散ってトロトロトロトロ燃えていた。「気をつけて出てこいよ」と怒鳴りながら飛び出した。家の中も油脂焼夷弾の油の火が部屋じゅうに飛び散っていた。そんな中で、父は黙々と防火用水に漬けて濡らした毛布を敷いていた。「おい、榮一、火の付いた布団を外に出しとけよ」たたくで積み重ねておいた布団にも、油の火がトロトロトロトロ燃えていた。母は濡れ毛布で柱や壁についてトロトロトロトロ燃えている火を拭き取っていた。父は天井でトロトロトロ燃えている火を火叩きで消していた。石燈籠にも、庭に植えたジャガ芋の葉にも火の花が咲いていた。この景色の記憶は今でも鮮明であるが、音に関しては全くない。

弟は外でただ立っていた。それを見た父が、「榮一、森久を頼

む。早く逃げろ！」「お父さんたちも早く逃げてきてね」「ああ、大丈夫だ！」

トロトロ燃えている庭の火をまたぎながら外に出た。向かいの尾崎さんの門と竹垣がトロトロ燃えていた。六歳の弟の手をきつく握りながら、野方小学校に向かう。北隣の朝戸さんには全く火が見えず、それから先は何もなかったように静かだった。野方小学校を右に曲り新橋川（現在・妙正寺川／味噌工場付近）を上に向かい、予定通りに三谷橋に着き、橋の下に潜り込む。

三谷橋は頑丈な石橋である。この一帯は黄色く色付いた麦畑で、焼夷弾が高圧線の鉄塔にぶつかって空中で火を吹く。麦畑に火がつくかなと心配したが大丈夫だった。沢山の人々が避難して来る。布団を担いだ人や、リヤカーを引いた人。「喉が乾いたよ」「もう少しの辛抱だ、我慢、我慢」

この川の辺りはのどかなところで、刑務所の土手には姉達とお弁当とゴザをもって、エビガニや小魚、そしてつくしんぼを取りにきていた。いわば我々住民の季節の遊び場である。川は決して綺麗ではなかった。七夕やお盆のお飾りはここに流しに来ていたし、猫や犬の死骸があつたりしていた。

だんだんと、火災がひどくなってきた。三月十日の時とは違って、歯も鳴らないし、震えもしない。不思議なものだ。刑務所にも焼夷弾が命中したらしく、物凄い火を吹いて燃えている。機内に電気をつけたB 29が、超低空でもうもうと立ちのぼる煙

の間を縫うように悠々と飛んでいく。機内の敵の飛行士がはつきりと見える。「ちきしょう！」

沢山の人が逃げてくる。僕らの頭の上を走ったり、車を引いたりけたたましい。両親が来ないのが気になり出す。その時、男の人と女の人が橋の下に逃げ込んできた。新婚さんらしい。雑巾とバケツだけ持っている。「ぼうやたちは二人だけかい？」それから、色々と話し掛けて激励してくれる。六歳の弟の鉄兜があんまり大きいので哀れに思ったのだろう。「喉が乾いたろう？」と喋ってバケツに川の水を汲んで、雑巾に浸して渡してくれる。弟は喜んですすする。皆で回し飲みをする。

B 29の音がいつの間にか聞こえなくなった。サイレンの音もいつの間にか聞こえなくなった。そして、黒々とした煙のなかで夜が明けてきた。煙ももの凄いいし、匂いも物凄いい。しかし、さっきまで赤い炎が龍の舌のように荒れ狂っていた刑務所の煙も、いくらか白っぽくなってきた。「もう、帰ろうか」「気をつけていくんだよ」「さよなら」ひとときの運命共同体であった。

野方小学校の下に救急車が止まっていた。二人で駆け寄って「おかあさん」と叫んだがだれも乗っていなかった。矢島さんの角に止まっている救急車にもいなかった。手をきつく握り合いながら、暗澹となるのが分かった。そして、二人で家に向かって走りだした。どこも焼けていないし静かだった。何人かの奥さんが立ち話をしていたが、僕らを見付けると「榮一さん！

澁谷さんは残っていますよ！」と怒鳴った。二人は走りだしただ。父と母は呆然として庭に立っていた。南隣との万年塀は焼け崩れ、庭先の物置は焼け落ちていた。父と母は僕らを逃がした後、周りで、火のなかで南空の強風に舞う炎と懸命に戦っていた。そのとき、西隣の塀越しに「澁谷さん！いるか！」と怒鳴り声が聞こえ、「いるぞお！」と叫び返すや否や、「ここで火を食い止める！」といいながら二、三〇人のお巡りさんが塀を乗り越えてきて、ベランダや、屋根に登ってトロトロと燃えていた油脂を消してくれたのが焼け残りの原因らしい。

我が家を境にして南と東は全く燃え尽きていた。福田眼科の向かいの炭屋の倉庫だけが未だに炎を上げて燃えていた。まったくの無人。煙の中に昇った黒い太陽！

六月二四日

学校の疎開学級と共に、上野駅をたつて福島県安達郡の高国寺に向かう。あたかも母の誕生日。安達が原の山中とはいえ爆弾が落ちて農民の肝を冷やした。当時、中学生は軍需工場への学徒動員が常であったが、幸か不幸か、僕らは異常な食糧事情への対応か、昼食との引き替えに付近の農家で数時間の労働する以外は、山寺で日夜、英語（当時英語教育は廃止の社会情勢にあったが）、数学、物理、そして国語の教育を受けていた。極度の栄養失調などと戦いながら……。

在京する両親は、皇都（当時、東京はこういていた）の状

況などを克明に文通してくれた（終戦当日の心情をも記したこれらの手紙は中野区に保存を依頼してある）。

八月十五日

その朝、雲ひとつない快晴の空をB29が一機飛んでいた。そして正午。寺の本堂に正座し玉音を待った。音声は雑音で明確であったが、突如、中村草田男先生が嗚咽し、諸先生そして学友が一斉に沈痛な、そして数時間後、四十数人は大きな混乱に陥った。敗戦・不安・平和・自由……。敗戦を悔しがり嗚咽する者、自由がきたと歓喜する者、同行の配属将校はひとり仏前で黙考していた。

その夕方、丸太やげんのうを手にした村の人々が三三五五、寺の境内に集まってきた。我々は何かと本堂の階段から見守った。人々はあつというまに櫓を建てた。夕日が真っ赤に燃える頃、何年間か本堂の電灯を覆っていた黒い幕は、その人達の手で解かれて、櫓の上に電灯が灯され、太鼓が置かれた。続々と村民が集まってきた。太鼓が打ち鳴らされ村民は輪になって盆踊りを始めた。「あゝああ、今年や豊年だよ……」踊りの輪は夜の更けるのも忘れて続けられた。わずか数時間の変貌に僕らは啞然とした。この農民達の姿を眼前にして、初めて戦争が終わり、平和が来たことが、徐々に身に染みてきた。

きっと東京の両親は首都への原爆投下の恐怖から解き放たれ、暗幕を外しているだろうなと思いが……。

